

エッセイストの手紙 たなか踏基

今月十七日、私は高校時代旧知のあるエッセイストに、原稿同封で手紙を出した。

拙著「奇妙な喫茶店」謹呈が切欠となり、今迄疎遠だった縁が繋がったので、次期作品の安曇野舞台「奇妙な猫たち」の序文をお願いしようと思っただからである。あるエッセイストとは、猫やポプリの随筆、シエクスピア研究書でも活躍の元我が松本西町隣人の旧姓井口明子であり、彼女なればこそ考えたからである。

井口明子とは、「黒部の太陽」「忍ぶ川」等の映画で活躍のご存知、紫綬褒章受賞のあの熊井啓監督夫人のことである。お願いの動機は単純である。ひとつは、同期会席上、女史の妹の桐原春子さんの親戚に出逢ったことである。もうひとつは、恵比寿三越で開催の絵本作家の個展の折に見た、平成十年刊行の雑誌「婦人公論」にあった。

過日(七月九、十日)、「四十五周年の集い」と銘打ち、F高校第十二回卒の同期会が松本の美ヶ原温泉郷のホテル翔峰で開催された。私は、初めて同期会なる会に出席してみた。在松本の幹事諸兄の努力で、五年毎に実施されてきたというが、私は恥ずかしながら、案内を受けても今迄殆どこの種の高校同期会に出席したことがなかった。版元にも勧められたのと、前小説が松本で好評なのに気をよくし、私は一つの構想「奇妙な」のシリーズ化を密に狙っていた。

この度、執筆の小説を「奇妙な猫たち」の題名とし、改稿中であつた。草稿は電話取材のみであつたので、二つの寺に行き住職にも直に逢つて、実名で小説を書く旨の了解やら、開山理由や仏像に

ついて、取材したかったのである。そうした安曇野取材を兼ねて、前者松本舞台の「奇妙な喫茶店」で世話になった人々にも御礼の積りもあり、前日の八日から松本の姉の所に泊まっていた。翌日以降の同期会参加は、いわばついでであつた。

九日の同期会では、元製薬会社勤務、今は定年で松本に戻ったという某氏と話が弾んだ。某氏も私同様、退職後一念発起、絵でも描こうと画材道具一式を購入したが、未だに一枚も描いていないと自嘲気味に語ったのが話の糸口であつた。

先方も、私の元いた会社が医薬系部門を持っていたこと、最近私がオマケの人生、定年後に興味で松本舞台の本を出したこと、私の友人に画家や芸術家がいる事に、共通点を見出したのか、私に親近感と興味を抱いたものと見える。後日、電話で明子女史と話した折、某氏の兄さんが、実は妹桐原春子さんのご主人であることが判明した。

さて二つ目の動機であるが・・・。
絵本作家が個展会場で見せてくれた「婦人公論」

写真記事は「昔のなかま」という連載企画の同窓生交歓の風景であつた。そこに高校美術倶楽部(アカシヤ会と呼称)の八人の面々が写っており、中に昨年三月逝去の芸大卒の彫刻家T君と細君、熊井明子夫人と絵本作家の友も一緒に写っていた。「婦人公論」編集部との段取・文書共にすでに出版会に名の通つた熊井夫人であつた。

今回の安曇野舞台の小説「奇妙な猫たち」のモデルは、その記事の写真に写っている一人の愛猫家の彫刻家であつたからだ。熊井夫人が多忙であることは勿論知っていたが、知人である彫刻家が、モデルであることで、「昔のなかま」のために、ひよっとしたら序文を書いてくれるのでは・・・という虫の良い淡い期待があつた。熊井明子夫人は、

彫刻家の細君とも親交があつたからだ。

程なくして、明子女史から前述の手紙の返事がきたが、案の定多忙を理由に、序文執筆はお引受けできない由の断りであつた。代わりに可愛らしい本二冊が、家内へのささやかなプレゼントにと同封されたきた。文面によると、「奇妙な喫茶店」を、ポプリの教室?で紹介してくれたらしく嬉しかった。それと、自らの体験と称し、物書きの先輩、明子女史からの指摘に少し耳が痛かったが、その言葉は助言としてとても有難かつた。

後日の電話でも同様の指摘を受けた。

読者を広く掴むためには、書き方に配慮がいるとのことであつた。つまり一部の固定した階層を意識して執筆するのではなく、広く多くの人に共認識を持たせる優しい言葉使いが重要であるとの指摘であつた。プライドの高い人には、例え創作と判つていても、自慢話の類は抵抗感を持たせるし、未経験の読者であれば、なおのことその読者のレベルまで降りていく、細かい配慮が必要であると・・・。著者の品位を落とすような下りは、今後命とりになり兼ねないので、極力原稿から削除せよとの注意であつた。返送されてきた原稿を読み返すと、明子女史の指摘に思い当たる節があつたので、後日再考の上改稿する予定である。

手紙でも電話でも、最後の明子女史の指摘はこうである。家内モデルの小説を書くことを勧められたのである。定年後に勝手気儘に、小説やエッセイ執筆を容認してくれる妻の存在に大感謝せよとの指摘であつた。物書きや教室運営にバリバリの活躍の傍ら、熊井家の家事をもこなす主婦としての顔や、ご主人熊井啓氏の妻としての日常すら、その言葉の裏に垣間見える気がしたのである。